

春に向かって、それぞれに 今できることを実践しよう！



発行所
天理教夕張大教会
〒068-0029
北海道岩見沢市9条西6丁目
☎ 0126-22-1248
FAX 0126-23-7275
yubaridai146@gmail.com

ホームページ
bariten.main.jp



LINE 友達登録
お願いします

会長より

今年の岩見沢は、昨年の記録的な下力雪ほどでは無いものの、二月に入ってから数十センチの積雪が続きました。札幌管区気象台からは全道の積雪量が毎日発表されていますが、2月9日現在では岩見沢139センチ、夕張135センチ、新篠津164センチ、美唄112センチ、札幌102センチと、各地で大雪の跡が見られました。北国の宿命とは言え、何をすることもまず雪をどけなければならず、この『ひきよせ』を手に取って下さった皆様の中にも、疲労困ぱいとなられた方がきつと数多くいらっしゃる事と存じます。けれども、お道の信仰者は今日もきつと何処かで、自分を置いてでも誰かの為に真実の心を尽くしているのだと思い、自分も神様の用木として、心のアンテナを外向きにしてコツコツ頑張りたいと思います。雪から教会を守るのも神様の御用。雪で埋まった車を助けるのも御用。職場や道端で爽やかに挨拶する

のも、相手が清々しくなってくれるなら神様の御用ですよ。一昨日も町内のゴミボックスへ歩いてゴミ捨てに行った時、雪で細くなった歩道を前から来た方に「どうぞ」と譲ると「ありがとうございます」と返ってきて、「大変ですよね」と笑ってお話しが出来ました。きつとこういう積み重ねでいい掛かるのだと思います。かつてご本部の先達、高井直吉先生が教祖から直接教えられた事を後の私達にも残して下さっています。その内容は「一日に一人を喜ばせたなら一粒の良い種時きになり、三日で三粒、十日で十粒、それを続ければ一年で三百六十五粒の種時きとなり、十年経てば三千粒以上。蒔いたる種は必ず神様が生やして下さる。先を樂しみに種を蒔こう。」というものです。不自由な時間がもう二年も続き、心の空白も確かにありますが、自分は今もう一度、一日一粒の種時きから始めたいと思います。十年後、夕張のたすけ一条の種は必ず芽吹くと信じます。

お知らせ

三月月次祭 3月15日 9時30分開扉献饌
青年会・女子青年オンライン合同総会
2月19日(土) 13時30分

第2回 少年会夕張団・雪だるまコンテスト さくひん募集中です。2月28日メ切



春季大祭の様

令和4年の正月は、前年の記録的な豪雪よりは少し落ち着いた積雪量で、朝から晩まで除雪作業に追われる事も少なかったのではないかとはいえ、15日が近付くにつれ、毎日10〜20センチの雪が岩見沢を始めとする空知・石狩地方に降り、また気温が高めでベタ雪だったこともあり、教会の雪かきに悪戦苦闘したところも多かったと思う。

迎えた令和4年の大教会春季大祭は、道内ところによつては大雪に見舞われる地域もあり、またオミクロン株の感染拡大が北海道にも到来し、参拝を断念した人も少なくなかった。

定刻9時半より開扉献饌。祭



儀式のち祭文奏上。その後、座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められた。大雪やコロナの影響で欠拝を余儀なくされた奉仕員もあり、おつとめの役割は集まった奉仕員で手分けして勤められたが、人数の少なさを感じさせない勇んだおつとめとなった。

講話には大教会長が壇上に上がり、「1月4日におぢばへ帰りまして、直属教会長一同で真柱様に新年のご挨拶をさせて頂きました。真柱様は冒頭『だいぶ体力が付いてきました』とお話されました。それまでは歯で噛むのなかなか力が入らず、栄養食などを食べていらっしやったのが、だんだん普通の食事を摂る事が出来るようになったとのことでした。またコロナ禍にある現状にも触れられ『教内の私達も色々な事を見せて頂きました。どこまでも元一日の喜びや、先人の道すがらを忘れないように、今一度私達の信仰姿勢を改めて建て替えていく。これは親神様がより良い方向に導

いてくれている、と思います』と仰いました。最後に、教祖百四十年祭の年が4年後に迫っています、何とか勤めさせて頂きたい、との事でした。

私の祖母、藤田三十乃は『どんな事でも喜べないことはない』と言っていたと、色々な方から聞いていました。順風満帆の時だけが喜べるのではない、しんどい思いをしている時の方が試されているのではないかと考えるんです。苦しい時にどんな心持ちで、どのような言葉を発しているのか、というのが、一番子ども達やこれからの人達に伝わるんだと思って、通らせて貰おうと感じています。

どうして私達に真柱様という存在が大切なのか、少し考えました。信仰というものは一人ひとりのもので、神様と自分の関



係だけで成り立つ、と言えばそれも一理あると思います。しかし、『一手一つ』という事を考えると、やはりそこには芯が一つ必要であると思うんです。一手一つとは、持ち場立場は違っても、同じ気持ちで勤めよう、という事だと思えます。おつとめもそうですね、それぞれ違う鳴物やてをどりをする中で、同じように心を揃えて勤める、それが一手一つだと思えます。

教祖が現身を隠されて、人々には信仰の目標が無くなったかのように感じました。その中で、それまで聞いてきた神様の教え、教祖の言葉を頼りに皆をまとめ、真柱という存在がリーダーとして一手一つに進んできたから、今のお道の姿があると思えます。そして今の真柱様もご自身の人生を賭けてつとめ、世界中の人達に心を尽くしてこられている。遠く北海道の私達の事もよくよくわかって下さっている。そして一番先を歩いて下さっている。私がどうして尊敬しているかというところ、そういう所なのですね。

今月は教祖が定命を二十五年縮めて現身をお隠しになられた、意義深い月であります。その重みをしつかりと思案させて頂き、今年一年どうしたら明るく通れるのか、しつかり考えながら歩

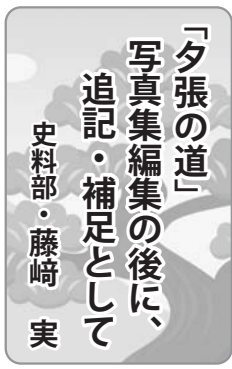


んで参りたいと思えます。おぢばへ帰る事もなかなかままならない状況ですが、それぞれの教会で真剣に願えばおぢばと同じ理を頂ける、と教えてもらっています。今は各教会からおぢばへ心を寄せて、一生懸命おつとめをさせて頂きましょう。その一手一つの心は、必ず親神様・教祖に受け取って頂けると思いますが」と話された。

その後、藤崎勇・青年会委員長より、2月19日に迫った、青年会女子青年合同総会への参加の告知を行った。また参拝者一同にも、オンラインでの視聴が可能であると伝え、青年会員以外の方も「夕張の若い人達が元気に頑張っている所を是非見てもらって、勇みの種にして下さい」とお願いした。

祭典後、昼から大教会長を合

め青年会の有志数名で、第二客殿周りの雪下ろしのひのきしんが行われた。気温も高く、事故の危険もある中であつたが、お互いに声をかけ合い、喜び勇んだ作業となり、無事に目的箇所



その1は門の左右にある松などについて書いた。今日は写真集には説明不足だつた所の補足をした。

その2

まずは表紙の写真の説明。大正13年6月17日、本部員の増野道興先生がご来会されて「教祖四十年祭地方講習会」を開催した時の記念写真である。増野先生だけが椅子に座られており、

実に晴れがましい一枚と思いきや、夕張の道を紐解いてみると、内情は危うく、会長家族の身上も危なかつたようだ。大正

11年に神殿が、翌12年には教祖殿が竣工していた。また部内教会も大正13年教勢倍加運動を受けて17か所が新設されて、35か所となつていた。

しかし、続いた普請の借財は増え続けて、差し押さえ、競売が続いて、教会経済はどん底の生活になつていて、砂糖一斤を貸してくれる店もなかつたという。

会長は痔を患い、カメノ奥さんは精神的に参つていた。

この日の先生の講話は、受講していた直轄信者・竹原の胸に刺さつた。膀胱カタルを病み、永くおたすけを受けていた岩見沢一の荒物商店の女主人・竹原チヨの心を強く打ち、その後家に帰つて整理し、夕張からの借用書が三宝に山と積まれて、お供えされたのであつた。

写真の中央の恰幅の良い富山大吉さんの左隣に、その竹原チヨさんがきちつと紋付羽織姿で立っている。この後に、おぢばの別科生となり、小樽市分教会の二代会長を勤めた人である。

その3

写真集に載せきれなかつた、夕張の火事のこと。北夕・矢野良一先生の話より。

昭和38年10月25日未明の出来事、風呂場のカマドから出していた木材に火が移つた。普段は焼け残つた薪は消えてしまうのに、この夜は燃え広がり、住み込んでいた矢野先生が気が付いた時は、着の身着のまま外に逃げるだけで、シャツ一枚パンツ一枚も持ち出せなかつた。その後消防から毛布を一枚、直轄の信者さん達が衣類を下さつた。

火事の事情聴取は警察と消防で何度もあり、かなりしつこく陰湿だつたという。同じことを何度も話したと。

炊事場と教職舎の内部を焼いたが、壊さずに黒く焼け残つた柱も板も、ススの部分を削つてそこにニスを塗つて、黒光りする食堂となつていた。

二度目の火事は翌年の4月14日、教祖誕生祭に帰る団参が發つた後だつた。

藤崎忠男先生が門や塀に黒く、コールタールを塗ろうと、固まつた一斗缶を炊事場のストーブで温めて溶かしていた。よく見ながらゆっくりやれば良かったのだから、ストーブの火も強めで、「早くしろ」と言われながら溶かしていると、いきなり缶に火が入つた。火柱が上がつて、

ゴーゴーと燃え始めた。

忠男先生が古い毛布を持ってきて上からかぶせると、火が下から上がつてきて、先生は火に包まれた。天井と言わず柱と言わず火が走つて燃え始めた。前年の焼け残りだから、すぐ火が回つたのだと思つた。

忠男先生に付いて、教祖殿・神殿へと向かい、お目標様をまづ避難させてもらつた。ふと忠男先生を見ると、顔も手もやけどで血だらけになつていた。すぐ隣の市立病院に行かせた。私はまた着の身着のまま焼け出された。

焼ける教職舎を見てみると、久保光子さんが「アキラはどこ！アキラ！」と泣き叫んでいる。

火の中に入ろうとするのを必死で止めた。息子の久保明君は、別に避難している神殿の方に居た。

この光子さんは、教職舎・會長宅の廊下を逃げる時に、わずかな事だが、木製やベニヤ張りの扉を全て閉めて逃げてくれた。それが猛火を止める事となり、夕張の神殿、教祖殿、客殿を守るので、扉は風が吹き抜けるのを防いだということだつた。

會長宅に行く廊下に燃え残つた扉があつた。ベニヤの板に薄い鉄板を張つただけの、実に粗末なものだつた。火に耐えて焦げてはいたが、焼けてはいなかつた。



夕張の道 写真集

創立～令和3年迄を見る



一年のご厚恩に感謝して
年末大掃除・餅つき

大教会では昨年未29日に毎年恒例の年末の大掃除と餅つきを行った。

当日は主に、大教会長、部内教会長が神殿上段、神具庫、神饌場の掃除をし、ひのきしんに集まった若い青年達で参拝場、廊下、神殿玄関の掃除、こども達は参拝場の畳を和気あいあいと拭きあげた。

また餅つきも同時進行で行い、教会長、青年、こども達と順番に餅しぶきを飛ばしあい、出来上がった餅をご婦人さん達が納豆、きな粉、あんこ、大根おろ



しなどで和え、そのお餅を各自頂いて解散となった。

コロナ禍で大勢でとはいかなかったが、普段できない箇所などの埃払い、拭き掃除などでき、新年を迎える準備ひのきしんに各自勇んで取り組んでいた。また数名は客間茶室の屋根の雪下ろしも行った。



春の学生
おぢばがえり

日頃は学生会活動にお心寄せ頂き有難うございます。新型コロナウイルスの波の中、今年度の春の学生おぢばがえりについて夕張学生担当委員会は次のように計画を進めさせて頂いております。

- ・ 期間 3月25日～3月29日
- ・ 内容 別席・教祖生誕地巡り、お楽しみ行事、学生会総会参加(本部中庭)

- ・ 参加条件 出発前にPCR検査キットを配布し、陰性の確認が出来た学生さんを対象とします。

- ・ 帰宅直前にも、千歳空港到着後、空港内の検査センターにてその場で結果が出る抗原検査とPCR検査をしてもらい、後日PCRの結果をお伝えします。
- ・ 締切 3月10日

尚、空港内での案内や、空港から天理、おぢば内では検査で陰性を確認済みの学生担当委員が引率・同行します。

また、期間中であれば各自の日程を提出して頂きそれぞれ個別に相談をさせて頂きます。

おぢばへ帰りづらい現状ではありますが、帰りたい気持ちを抱く学生さんをできる限りサポートさせて頂きたいと思っております。ご参加検討の程、よろしくお願ひします。

庶務部 1月

- ▽本部鏡開きひのきしん 竹田 元(馬追) 1・4
- ▽詰所修練棟軒天修理 1・24～25

- 竹田 勲(馬追)
- 富山知一(栗山)
- 岩佐善昭(志加ノ谷)
- 竹田 元(馬追)
- ▽詰所教養掛 1月 竹田 元(馬追)
- 2月 不在
- 3月 松下勝彦(神富)
- ▽をびや1件

大教会日誌抄 1月

- 1日 元旦祭
- 2日 年頭会議(オンライン)
- 4日 会長、おぢばへ
ご本部年頭挨拶
- 6日 会長、帰会
- 7日 会長、旭都分巡教

- 8日 会長夫妻、峰延分巡教
- 9日 前会長、長沼分巡教
会長、理喜道分・50日祭
祭主

- 10日 会長、北夕分巡教
- 11日 会長夫妻、理喜道分巡教
- 14日 大祭準備
- 15日 春季大祭
- 18日 会長夫妻、栗山分巡教
- 19日 会長、札美分大祭へ
- 22日 会長、おぢばへ
- 24日 会長、本部神殿当番
- 26日 本部春季大祭
遥拝式

- 27日 会長、少年会年頭幹部会
- 28日 出席、かなめ会
会長、帰会



1月15日春季大祭の日 門横の松、たっぷり雪が乗っている。